

9/7/2004

『甲斐ヶ嶺 67 号』(2004 年 10 月) 巻頭言

縦横

「先生、いくら勉強してもわからないので教えてほしいのですが、この世界を動かしているのは、マヌケそうに見せかけているけれども本当は賢い人間なのか、それとも本当にマヌケな人間たちなのか、どっちなのでしょう？」(ローレンス・J・ピーターズ)

核開発疑惑に始まって、スカッドミサイルや生物化学兵器を実戦配備しているとまで説明された大量破壊兵器はイラクではついに見つからなかった。これら政治的プロパガンダを世界中にばら撒いた当の米国や英国ですら、曲がりなりにも真相究明のための調査がなされた。しかし、この国ではそういうことにはなっていない。だが、その英米の情報を盲目的に信じたがゆえに派兵に及んだことは間違い無い。しからばその不明を恥じて、国民に詫びるのが当たり前の人間のすることだ。それなのに、小泉首相は「フセインが見つからないからといって、フセインがいなかったとはいえない」という論理を展開し、「だから大量破壊兵器が無かったとはいえない」という破廉恥な詭弁を展開して、己の責任は全く不問にしたまま、ついに「多国籍軍」という名の日本国憲法上は存在しない軍力をイラクに展開させてしまった。こういう輩を政治指導者と仰いでいるのだから国民はたまったものではない。

憲法第 9 条に反して創設した軍隊に対して、日本政府は「海外出動禁止」(1954 年)と言い、「国連の枠内でなら P K O 出動 O K」(1992 年)と言い、「テロ対策特別措置法」(2001 年)ではその国連も消え、「イラク特措法」(1993 年)ではついに海外出動、そして今「多国籍軍参加」(2004 年)だ。破廉恥にして無責任、無節操。しかも、最後の 3 つの事件すべてが小泉連立内閣だ。

しかし、これが小泉首相だけの特許ではない。この国では、指導層はいつだってこれなのだ。それも政界はいうに及ばず、官界、学界、財界、産業界、宗教界、どれをとってもどす黒い恥部を持つ。そして、こういう輩が愛国心を語り、道徳を語り、学問を語り、人々の幸福や安寧を語る。

こういう指導層の下で、いま憲法「改正」が語られている。今まで一度も憲法を守らなかった者達が作るという憲法にどうすれば規範力が盛り込まれるというのであろうか。